

学校園等を核とした新しい家庭教育支援の展開と可能性

— とくしま親なびワークショップの取組みを通して —

Development and possibilities of new family educational support systems with a focus on schools

— The role of Tokushima parent workshops —

木 村 直 子

KIMURA Naoko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 33 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.33, Feb., 2019

学校園等を核とした新しい家庭教育支援の展開と可能性

— とくしま親なびワークショップの取組みを通して —

Development and possibilities of new family educational support systems with a focus on schools

— The role of Tokushima parent workshops —

木村 直子

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学 学校教育研究科
KIMURA Naoko
Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本稿は、2016年より徳島県で実施している保護者を対象としたワークショップの実践事例について論じる。第一にこれまでに実施してきたワークショップに共通する、ワークショップの依頼から、事前準備、当日の展開、参加者の反応、カンファレンス、ファシリテーターによる事後報告までの、ワークショップ展開の実際について記述した。第二に、これまでに実施したワークショップの中から特徴的な実践事例を挙げ、実施の際の留意事項について、整理した。第三に、参加者の事後評価アンケートの結果をもとに本ワークショップの意義について記述した。そして、最後にこのワークショップがより発展するための方策として、ワークショップの質を保証するスーパーバイズ体制の構築について考察した。

キーワード：家庭教育支援, コミュニティスクール, 保護者, 保護者支援

Abstract : This paper reports on examples of workshops held for parents/guardians in Tokushima Prefecture as of 2016. First, regarding workshops implemented through the present, we note the entire process spanning initial requests for these workshops, preparations, event day proceedings, participant response, the conference, and post-event facilitator reporting.

Second, citing distinct examples from amongst those implemented, we have noted important points in the implementation process. Third, we have written about the significance of the workshops based on post-event participant questionnaire results. In closing, as a means of further developing these workshops and helping to ensure quality, we consider a supervisory structure.

Keywords : family educational support, community schools, parents/guardians, parent/guardian support

1. はじめに

子どもの貧困、児童虐待認知数の増加、少子化、核家族化、ひとり親家庭の増加、地域社会の希薄化等、我が国は子どもを育てる家族にとって厳しい情勢にある。2012年に内閣府・文部科学省・厚生労働省の協働により乳幼児期から自立までの切れ目のない子ども・子育て支援を総合的に推進する「子ども・子育て関連3法」が成立したが、現在も各フィールドで個別の理念や目標に基づく支援事業として展開され、総合的推進には至っていない。

現代社会は、子どものいる家族の多くが、子どもと夫婦またはひとり親家族となり、規模を縮小しただけでなく、地域社会とのつながりも希薄化している^{注1)}。2008

年「国民生活選好度調査」によると、近所との付き合いについて、50.3%の人が行き来をする関係にないと答えている。また、地域社会の凝集性や近所づきあいの程度については、人口密度が高く、他府県からの転出入が頻繁な都会と、人口密度が低く他府県からの転出入の少ない地方では異なるが、現代社会において多くの家族が地域社会の機能の衰退を感じており、近隣を子育てにおけるソーシャルサポートとして頼ることが難しい状況にある^{注2)}。子どもや子育て家庭への支援の体制が整備されつつあっても、ネットワークや資源を円滑に活用することができない背景には、このような地域のつながりの希薄化があると考えられる。

このような社会情勢の中、2006年の教育基本法の改正により、家族の教育的役割が生活習慣の取得、自立心の

育成、心身の調和的発達、子どもの社会的自立であると明記されたことによって、家族がその役割を果たせるように国や地域が家庭教育を支援するという「家庭教育支援」が、文部科学省を中心に推進されるようになった。この流れを受けて徳島県では、2016年4月1日より徳島県家庭教育支援条例を施行し、子どもの健やかな育ちを支える家庭教育の推進を、県が総合的に施策として推進している。徳島県の家庭教育推進・強化事業の中でも、県教育委員会生涯学習課において力を入れて実践されているものに、家庭教育推進リーダー養成事業がある^{注3)}。この事業では、県独自の家庭教育に関する教材の作成と保護者の参加型学習を進行するファシリテーター養成を行い、ファシリテーターが進行役となりワークショップを展開している。このワークショップは、保護者同士が集い、自分の子育ての悩みや子どもとの接し方等を話し合い、お互いの良さや他の家庭のあり方に触れながら学んでいく「保護者相互の学びや気付きを取り入れたワークショップ」である(木村, 2016)。

II. 本稿の目的

徳島県家庭教育支援条例に基づき、子どもの健やかな育ちのために家庭教育を推進していく「保護者相互の学びや気付きを取り入れたワークショップ」＝「とくしま親なびワークショップ」は2016年より開始され、児童館、幼稚園、小学校、中学校、高校における保護者向けのワークショップを多数実施している。また昨今のアクティブ・ラーニングが重要視される教育現場の要請を受けて、教員や専門職の研修会、小学校における児童への実施等その活用範囲を拡げている。本稿では、第一にワークショップに共通する、ワークショップの依頼から、事前準備、当日の展開、参加者の反応、カンファレンス、ファシリテーターによる事後報告までの、ワークショップの展開の実際について報告する。第二に、これまでに実施したワークショップの中から特徴的な実践事例を挙げ、実施の際の留意事項等について整理する。第三に、参加者の事後評価アンケートの結果をもとに本ワークショップの意義について記述する。そして、最後に今後の展開として、ワークショップの質を保証し、このワークショップがより発展するためのスーパーバイズ体制の構築について考察する。

III. とくしま親なびワークショップの取組

1. ワorkshop実施の実際

とくしま親なびワークショップは、乳幼児期から中学生の子どもを育てる保護者の集まる場で、子育てや家庭生活をテーマに、楽しく和やかな雰囲気の中で、話し合

いやワークショップを行い、時間を共有することで、保護者同士のつながりを深め、子育てや家庭生活について気軽に相談し学びあう仲間づくりを進めることを目的としている。保護者同士が集い話し合う場には、専門家や先生が立ち会い、教示するのではなく、話し合いがスムーズにできるよう保護者の中からファシリテーターを養成し、ファシリテーターがプログラムを進行する。ファシリテーター養成の対象者は、家庭教育に関心がある県内在住者で子育て経験者・保護者等を基本としている。

とくしま親なびワークショップは、保護者参加型のワークショップであり、ワークショップを円滑に進行するファシリテーターが重要な役割を担うこととなる。ファシリテーターとは、人間関係トレーニングやグループワークで活躍する援助者の呼び名であるが、本ワークショップでは、場の雰囲気や和ませ、ワークシートを用いた活動において、参加者が自分の思いや気持ちを自由に発言できるように環境を整える役割が期待される。とくしま親なびプログラムでは、参加した保護者が気付きや学びを得たり、保護者同士が一体感を感じたり、楽しい時間を過ごすための案内人(ナビゲーター)としての役割を担ってもらいたいと願い、ファシリテーター役の人を「親なびげーたー」と命名している。徳島県教育委員会生涯学習課主催のファシリテーター養成講座(18時間・実習を含む)を修了した人を「親なびげーたー」と認定し、県教育委員会の教育長名で委嘱状が出される。認定された「親なびげーたー」は、認定証を持って、学校園へ出向き、ワークショップを遂行する。本稿では一般性を失わないために「親なびげーたー」をファシリテーターと表現する。

1) ワorkshopの依頼

ワークショップの依頼は、県の教育委員会生涯学習課に集約される。生涯学習課の作成しているワークショップ実施の案内チラシを見たり、研修等で広報を聞いた現場の先生が直接依頼をされることや、各学校園のPTA活動をされている保護者の方が、何かの機会にワークショップを経験され、自校園での実施を学校園に持ちかけて下さることも多い。いずれにしても、生涯学習課で集約された依頼を、実施場所や内容に合わせて、ファシリテーターを選定し依頼する。依頼を受けたファシリテーターは、自身のスケジュール等を確認し、依頼を受ける。

2) 事前準備

依頼を受けたファシリテーターは事前準備として、プログラム集のテキストの内容を確認し、事前準備から当日の進行、アイスブレイクの内容、実施後の流れを自ら考えて準備する。プログラム集のワークショップの展開

例には、全てのテーマに対して、タイムスケジュール【①導入、②アイスブレイク、③展開、④振り返り、⑤まとめ】のモデルが示されている。ワークショップは何人からでも実施可能であるが、プログラム集の例は20～30人程度で、所要時間約60分程度の設定になっている。したがって、当日の参加者の予定数や実施時間に合わせて、タイムスケジュールを修正する必要がある。大人数のワークショップでは、複数人のファシリテーターで実施する場合もある。その場合は事前に役割分担(司会役・アイスブレイク役・タイムスケジュール役等)を決める。

3) 当日の展開

当日は司会役のファシリテーターからの教示や知識の提供は最小限にし、楽しい雰囲気の中で保護者が自分の家族のことを振り返る時間や、その時その場で感じたことを自由に発言する時間を確保することに重点をおく。参加者同士が自分たちの子育てを語り合う時間を十分にとることによって、子育てにおける孤立感や不安を和らげ、何気ない話のできる相手を見つけたり、自分で感じたり考えたりする内的能力を活性化させたりすることに繋がる。そのため、ワークショップにおけるタイムキープは非常に重要であるが、タイムキープにとらわれ過ぎると、気忙しい空気が流れ、和やかな場を構成することが難しくなるので、留意が必要である。

4) 参加者の反応

ワークショップの参加者は必ずしも自発的に参加している保護者ばかりではない。ワークショップの始まりの時には、「何をさせられるのだろうか？」という不安感や緊張が見られる。この緊張感是非常に大切である。当初の緊張感があるからこそ、アイスブレイクによる安堵感が大きくなり、そのギャップの中に話しやすい空気が生まれる。またこのワークショップは保護者に‘正しい子育て’や‘良い家庭教育’のあり方を教えたり、伝えたり、参加者同士で答えを導き出したりすることが目的ではない。プログラムを通して、楽しい時間を共有したり、互いの思いに共感したりすることで、それぞれが子育てを振り返ったり、個々の家庭教育について考えたりするきっかけとすることをねらいとしている。先輩保護者との関わりや、保護者同士のコミュニケーションを緊密にすることで、保護者自身の「気付き」や自然な学びが生まれる。実際にワークショップの時間が終了しても、その日初めて出会った保護者がその場に残り、話し続けることも少なくない。それは、まさにワークショップの成功を示す一つの状況ともいえる。

5) カンファレンス

ワークショップ実施後には、教育委員会生涯学習課の

職員やワークショップを実施したファシリテーター、家庭教育推進に関する専任アドバイザーが同席して、30分ほどのカンファレンスを行う。カンファレンスの内容としては、はじめにワークショップを進行したファシリテーターから、実施して感じたことや困ったことを語ってもらい、その後職員やアドバイザーから助言したり、みんなで当日のワークショップの様子や成果を共有したりすることで、ファシリテーター同士の一体感やチーム意識を醸成している。このカンファレンスは、ファシリテーターとしてのスキルアップのみならず、ボランティアに活動されているファシリテーターのモチベーションとなっている。

6) ファシリテーターによる事後報告

ワークショップを実施したファシリテーターは実施後、教育委員会生涯学習課に報告書を提出することになっている。報告書には、ワークショップの流れや概要、使用したワークシート、工夫点、参加者の反応等ワークショップの内容を記述する。さらに、実施した感想や今後の課題についても記述し、全体でA4一枚程度にまとめ、提出する。

2. 特徴的な実践例^{※3)}

1) 小学校・幼稚園・保育所等の参観日におけるワークショップ

保育所や幼稚園、小学校では、年間を通して複数回の参観日が設定されている。現代は多くの家庭が共働きであるが、参観日の日は仕事を休む等工面して参加する保護者も多い。その機会に保護者参加型ワークショップを計画することによって、クラスや学校園における保護者同士の肯定的なつながりを形成するきっかけとなる。参観日以外にも、入学(入園)説明会等での実施も効果的である。

集団保育・教育の場での実施の際には、実施時期によってワークショップのテーマやその展開を考慮すべきである。4月であれば、進級やクラス替え等で保護者は互いを十分認識できていない場合がある。そのような場合には、アイスブレイクに十分な時間をとって、緊張をほぐし、楽しいゲームを取り入れた自己紹介等、参加者同士の交流が生まれるゲームをすることで、互いの距離を縮めることができる。

近年学校園における保護者支援は、社会的な背景とも相まって、学校運営や学級運営の中でも大きなウェイトを占めている。保護者支援の困難さや課題は、どの学校園にも共通するものとなっている。したがって、学校園は保護者が集まる場において、教育的な内容を組み込みたいと考えるかもしれない。しかしワークショップの内容やワークショップ後のまとめの中に、学校園が家庭に

望む「こうあるべき、望ましいあり方」を示すことは、逆効果であり、本ワークショップの趣旨にも反する。ワークショップのテーマについて、学校園や教師の考えを伝えることは、時に保護者に望ましいあり方を強制し、反発を生む場合がある。教育的な意義を持たせるためには、ワークショップの当日の展開に介入するのではなく、ワークショップを計画する段階で、保護者に話し合ってもらってテーマを学校園の保護者の実態に合ったものにする、学校園として保護者とともに取り組んでいきたい内容とする、等に留めるべきである。またワークショップ実施前に保護者や子どもへの調査を実施し、その結果を保護者にフィードバックする機会とワークショップを同日に実施するというのであれば、エビデンスに基づく実践となり、ワークショップの教育的な意義が高まる。これについては、後述の「2) 子どものウェルビーイングと家庭生活に関する調査結果を踏まえたワークショップ」に記述する。

2) 子どもの健やかな育ちと家庭生活に関する調査結果を踏まえたワークショップ

保護者に向けたワークショップに、教育的な意義を含ませる場合には、前述の通りワークショップ当日に説法としてのまとめを行うのではなく、事前の準備段階に手間暇をかけることが大事である。その一例として、子どもの生活習慣や家庭生活の実態が子どもの健やかさ(ウェルビーイング)に及ぼす影響を明らかにするアンケート調査を行い、その後調査結果を踏まえたワークショップを実施する方法を記述する。

ここでは、「子どもの健やかさと家庭生活に関する調査」を実施した幼稚園で展開した保護者参加型ワークショップの内容を報告する。

幼稚園において6月頃に子どもの生活習慣や家庭生活と子どもの健やかさを測定する子どものウェルビーイング指標を盛り込んだ調査を実施した。その結果次のようなことが明らかとなった(木村, 2017)。

- 子どもたちは寝る時間が遅く、年少児においても、9時までに寝る幼児は、2割に留まる。また年長児及び年少児いずれにおいても、10時を超えてしまう幼児が1割程度存在する。
- 子どもたちは、平日テレビやDVD、電子機器の使用している時間が長く、「テレビやDVDの視聴時間」は年少児も年長児も1時間以上の幼児が7割を超え一般化しており、2時間以上見る子どもも3割いる。
「電子機器(DSやPSP等電子ゲーム、スマートフォン、タブレット端末等)を使う時間」についても、1時間以上使用する幼児は年少児で2割を超え、年長児においては、3割を超える。

○保護者の生活習慣に対する意識結果では、「規則正しい生活をさせる」「夜9時までには寝させる」ことを心がけたいと考える保護者は9割を超える。また「テレビ・DVDを長く見せない」「電子ゲーム・機器(スマホ等)を使わせない」についても、6割を超える保護者が心がけたいと回答している。

*これらの結果から、保護者の生活習慣に対する意識(心がけ)は高いが、実態としてはなかなか実行できていないことが明らかとなった。

調査結果を踏まえ、計画したワークショップは、次の通りである。ワークショップの前に、調査結果について全体に講演する時間を20分ほど取り、その後保護者参加型ワークショップをする。この場合上記の結果を踏まえると、「夜、何時に寝ている?」といった就寝時間に関するものや、「こんな時どうする?」のように、日常生活習慣において思い通りにならない子育ての困難さを共有するもの、また就学前の年長児であれば「ドキドキワクワク新入学!」のように就学に向けた保護者の心配を語り合うようなワークシートを用いても良いだろう。最初の20分の講演を通して、「規則正しい生活は、子どもにとっても家族にとっても大切ななあ。」「規則正しい生活は大切だと分かっているけれど、なかなか実行できていないなあ。」「自分の家庭だけではなく、他の家庭でも同じような状況なんだなあ。」ということが共有された。これによって、参加型ワークショップが始まって、保護者らは安心して自分の家庭のことを話すことができた。また、最初の講演が話題提供になっており、なかなか話す内容が思いつかない保護者にとっても、その後の話し合いのハードルが下がり、話し合いがスムーズに行われた。

このように事前の調査結果を踏まえたエビデンスに基づくワークショップの実施は、保護者のワークショップ参加へのハードルを下げるというだけでなく、実施する機関(ここでは幼稚園)にとっても、保護者の実態に合ったワークショップのテーマを選ぶことができ、エビデンスに基づく有効な保護者支援や家庭教育支援が行える。

3) 児童館・子育て支援センターでのワークショップ

児童館や子育て支援センターは、保育所のように登録した保護者だけが利用するわけではない。施設にもよるが、基本的には立地地域の乳幼児とその保護者が日中自由に遊びに出かける場である。最近では誕生日会やリズムミック等イベントを取り入れている児童館や子育て支援センターも多いが、子ども中心のプログラムが組まれており、保護者同士の交流を主目的としたイベントを実施している場はあまりない。普段から顔見知りの「ママ友」・

「パパ友」であっても、家庭生活や子育てについての思いを、少し踏み込んで話し合う機会は少ない。改めてワークショップという枠の中で一つのテーマについて話す機会は、乳幼児を育てる保護者には貴重な時間である。子どもと同伴で集う保護者が、安心して保護者同士の会話を楽しめるように、可能な限り託児や保育を準備する。

ワークショップの約束事に守られた空間は、参加する保護者の子育てにおけるプレッシャーや緊張から開放してくれる。とりわけ乳幼児期の子どもを持つ母親の中には出産によるホルモンバランスの影響で、感情が高まりやすい人も多いため、少人数のゆったりとした空気の中で実施することが望ましい。実施前は顔を知る程度だった保護者同士が、ワークショップが終わった後も、その場に留まり、話続けることもよくあるため、実施時間の設定やワークショップ実施後の時間的な余裕を考えておく必要がある。

4) 大人数の保護者が集合するイベントにおけるワークショップ

60名を超える大人数の保護者参加型ワークショップを計画する際には、会場が複数用意できる場合は、30名程度の集団に分けた方が、効果的なワークショップが実施しやすい。しかし、会場や会の目的によっては、90名や120名、200名の参加者全員で一つのワークショップを実施する場合もある。その場合は、集団が大きくなればなるほど、参加者への指示を明確にすること、展開のタイムスケジュールの管理をきちんとすることが鍵となる。さらに、大きな集団の場合、一度動き出した集団を止めることは難しいため、集団の流れに沿いながら、柔軟に進行する必要がある。こういった場合には複数のファシリテーターが連携して場を構成する、チームファシリテートが有効である。

大人数で実施する場合には、多くの人と出会えるアイスブレイク、例えば決められた時間内に多くの人とじゃんけんするゲームや、その場で作成した20枚の名刺を配り歩くあいさつゲーム、お題を決めて同類同士で集まるゲームを取り入れ、参加者全体の一体感を作ることが大切である。また、ワークショップ終盤に行う全体での共有や振り返りについても工夫が必要である。例えば90名のワークショップであれば、5名1グループにした場合、18グループできる。グループでの話し合いの内容を全体で共有するために、18人のグループの代表者が2分ずつ発表するという計画では18人×2分=36分となり、30分以上他の人の発表を聞くこととなり、グループでの話し合いで盛り上がった気持ちが冷めてしまう。このような場合にはグループでの話し合いの後、グループメンバーを入れ替えて新しいグループを作り、前のグループで話し合ったことを共有すると、他のグループの人の意

見をじっくり聞くことができる。新しいグループ内で1人2分ずつ発表すると、5人×2分=10分となる。さらに後2回グループメンバーを入れ替えると、(5人×2分=10分)×3回=30分となり、同じ30分間で全てのグループのまとめをじっくり知ることができる。このように、グループの大きさに合わせて、ワークショップの展開やアイスブレイクの内容、振り返りの仕方に工夫が必要である。

3. ワークショップ参加者からの評価

ワークショップ実施後、参加した保護者に事後アンケートを依頼した。保護者参加型ワークショップは、2018年3月9日現在、27か所、977名の保護者が参加した。事後アンケートの集計結果は以下の通りである。

1. ワークショップは楽しく、有意義なものでしたか。					
①大変良かった	②良かった	③ふつう	④あまり良くなかった	⑤良くなかった	
613 63%	347 36%	12 1%	5 0	0 0	
2. 今後の子育てや家庭生活に活かそうですか。					
①十分活かせる	②活かせる	③ふつう	④あまり活かさない	⑤活かさない	
462 48%	468 48%	30 3%	6 1%	0 0	
3. 本日のワークショップのテーマ(プログラム)はどうでしたか。					
①大変良かった	②良かった	③ふつう	④あまり良くなかった	⑤良くなかった	
539 55%	392 40%	36 4%	6 1%	0 0	
4. このような機会があれば、また参加したいと思いますか。					
①ぜひ参加したい	②参加したい	③ふつう	④あまり参加したくない	⑤参加したくない	
306 32%	555 57%	74 8%	23 2%	6 1%	
5. ファシリテーターさんの進行はどうでしたか。					
①大変良かった	②良かった	③ふつう	④あまり良くなかった	⑤良くなかった	
617 64%	326 34%	20 2%	3 0	0 0	

* %は小数点第1位四捨五入

ワークショップ実施後の評価アンケートでは、977名の参加者の99%が、「ワークショップは楽しく、有意義なものだった」(①大変良かった、②良かった)と評価している。また96%の参加者が「今後の子育てや家庭生活に活かそうである」(①十分活かせる、②活かせる)と回答し、89%の参加者が「機会があればまた参加したい」(①ぜひ参加したい、②参加したい)と回答した。これは非常に驚異的な結果であった。プログラムを作成し、ワークショップの実施計画を練っている段階では、これほど有効なワークショップになるとは想像できなかった。さらに、ファシリテーターに対する評価についても、参加者の98%が「よかった」(①大変良かった、②良かった)と回答している。保護者参加型ワークショップを進行するファシリテーターは、実施先の保護者ではないため、参加者の評価には影響はなく純粋な結果である。

ここに示した素晴らしい結果は、いずれもワークショップの満足度について問う事後評価であり、ワークショップの実施が参加者の家庭生活の改善や充実につながっていることを証明するものではない。それでも、保護者参加型ワークショップの趣旨や目的を考えれば、想定以上の結果が生まれたといえる。良い方向に想像を超える結果となったのは、やはり「子育て期の保護者の持つ潜在的な力」が影響していると考えられる。ワークショップに参加した保護者は、必ずしも自発的に参加した者ば

かりではない。子どもの参観日に出かけた先で「偶然」参加することとなった者も多い。そういった中でも保護者らは、自分の子育ての話を他の保護者に語ったり、また他の家庭の話を聞いたりする場を楽しむ力を持っているといえる。またその背景には元来保護者は他者と共感・協働しながら子育てをしたいと願っていることが考えられる。

さらに「子育て期の保護者の持つ潜在的な力」を発揮しているのは参加している保護者だけではない。ファシリテーターとなっている保護者も同じである。ファシリテーターとなった保護者は、どの保護者も素晴らしく、それぞれの持ち味を生かしたワークショップの展開を実践している。初めて出向くフィールドで、非常に柔軟かつ場面に合った雰囲気作りを、自然な形で実践していた。一般的なグループワークの実践者がその専門性を大学等で獲得する期間を考えると、3日間の研修だけで、十分な技術や専門性を獲得できたとは考えにくい。そこにはファシリテーターとなった保護者のモチベーションやワーカビリティが大きいであろう。そして、同じ時代を生きる保護者（ファシリテーターの保護者、参加者の保護者）同士が「子育て」という共通の課題でつながり、その潜在的な力を互いにエンパワーすることによって、ワークショップが持つ集団の治癒教育的な力が働き、より有意義な場が生まれたと考えられる。

子育てや家庭生活は個性が高く、これまで子育て支援や家庭教育支援は個別の支援を行うことが多かったが、集団を対象とした保護者による保護者のためのワークショップの成功は、まさにこれからの子育て支援・家庭教育支援のあり方に大きな転換をもたらすといえよう。

IV. 今後の展開

本稿では、徳島県における保護者参加型ワークショップ（とくしま親なびワークショップ）の実践事例をもとに、学校園をフィールドに展開される家庭教育支援の展開やその発展の可能性について報告してきた。保護者参加型ワークショップはグループワークの一形態と捉えることもできる。したがって、ファシリテーターは、グループワークにおける原則を守って進行する。グループワークとして守るべき原則は、「個人尊重の原則」、「段階的取り組みの原則」、「相互作用の原則」、「制限の原則」、「評価の原則」である。「個人尊重の原則」としては、参加者ひとり一人を尊重し、全員が安心して参加できるようにする。集団活動の成功のために個人の人としての権利が奪われることがないようにする。極端にしゃべりすぎている人や、孤立して傍観している人にも配慮する。プログラムを淡々と進行させるのではなく、ひとり一人の発言に耳を傾け、プログラムの進行に活かす。ワークショッ

プの場合は、参加する全ての人を等しく平等に受け入れ、温かく楽しい場となるように心がける等が挙げられる。「段階的取り組みの原則」としては、参加者の中には、集団活動に慣れない人もいるので、ワークショップ実施時には最初は全ての人が参加しやすい平易な活動（ゲーム等）から始める。参加したくない・発言したくない人には、強引に参加させるのではなく、「見ていただけでもいいですよ」「パスもありですよ」と肯定的な声をかける等が挙げられる。「相互作用の原則」としては、ワークショップでは、ファシリテーター役の人と参加者の間でやりとりするのではなく、参加者同士が互いに相互作用できるように配慮する。グループワークでは、参加者同士の相互作用が全体を変化させ、全体の変化が参加者個人に変化をもたらすことに留意し、相互作用が活性化されるようにすることが大切である。「制限の原則」としては、ワークショップに参加する人が安心して場を共有するために、参加する全ての人に約束事を説明し同意を得ることが重要である。参加者と共有する「ワークショップにおける約束事」は、①全員が居心地良く参加できるよう配慮すること、②他の人の考えも尊重すること、③参加者の個人的な情報をもらさないこと、である。

さらにファシリテーターの倫理としては、①ワークショップ中で、参加者に発言を強要したり、故意に一部の人だけの意見を聞いたりしない、②参加者の発言を批判したり、ファシリテーター（自分）の意見を押しついたりしない、③参加者の発言を茶化したり、場の盛り上げに使ったりしない、④プログラムの中で知った参加者個人の情報を、他人にももらさない、⑤会の目的である、楽しい時間を共有することに反することをしない、⑥県の事業の趣旨以外の内容（自分の活動の広報・商品の紹介）を話さない、が挙げられる。

ワークショップにおけるファシリテーターとしての専門性は非常に奥深く、グループワークにおけるソーシャルワーカーや、グループセラピーにおけるセラピストとは異なる専門性が求められる。専門性といえども「専門家」ではなく、同じ時代を生きる同士としての感覚が重要である。したがって、保護者参加型ワークショップには特有のスーパーバイズ体制が欠かせない。現在保護者の参加型ワークショップは、ファシリテーターの役割を担ってくれる保護者の存在によって支えられている。このファシリテーター役の保護者をどう支援し、サポートしていくのが、今後の家庭教育を推進していく上で、大きな鍵となる。

保護者参加型ワークショップを展開するファシリテーターは、家庭教育に関心のある保護者であり、18時間の養成講座を受けた後に、すぐに実践となるため、実地の中で専門性を高めていくことになる。したがって、この保護者参加型ワークショップの実施直後に、ワーク

ショップに陪席した熟達者（ワークショップ経験の多いファシリテーター）や、県教育委員会の家庭教育推進に関する専任アドバイザー、生涯学習課の家庭教育担当者とカンファレンスをすることによって、ワークショップ中に感じた疑問や手応えを言語化し、参加した保護者の反応を踏まえた助言を受けることが大切である。このような陪席を伴うカンファレンス（陪席カンファレンス）はまさにスーパーバイズの間でもある。ファシリテーターは、ワークショップに同席したアドバイザーらとのカンファレンスを何度か経験すると、自分のワークショップの展開や経験をスムーズに語るができるようになる。そして次第にワークショップに陪席がなくても、事後に自らのワークショップを振り返り、助言を受けるだけで、専門性を高めていけるようになる。実際にA県において2016年度及び2017年度に養成したファシリテーターらは、複数回の陪席カンファレンスを経ると、ワークショップ実施後に客観的な自己評価やワークショップ中の自分の内的な経験、参加した保護者の姿を詳細に語る姿が見られるようになった。陪席カンファレンスの必要回数は、個々のファシリテーターによって異なる。また、ファシリテーターとなる保護者の中には、対人援助専門職としての経験（例えば、教師、カウンセラー、児童指導員、保育者等）がある者も少なくないが、専門職としての経験が、保護者参加型ワークショップ展開の熟達者となるための期間を短縮するとは限らない。それは、保護者参加型ワークショップで求められるファシリテーションは、他の専門職の相談援助とは大きく異なり、答えを出さずにオープンエンドの和やかな話し合いの雰囲気を作りだすことにあるからである。時に同じ時代に子育てをする同士として共鳴し、時に淡々とタイムキープに徹する、この間合いはまさに独自の専門性といえる。

またスーパーバイズの体制以外にも、定期的にファシリテーター同士が情報を交換する場を持ったり、ファシリテーターとしての専門性を高めるようなフォローアップの研修を準備したり、ファシリテーター自身のカウンセリングを実施したりすることが、ファシリテーターのワーカビリティやモチベーションを高めることになる。

注記

注1) 2008年「国民生活選好度調査」によると、近所との付き合いについて、50.3%の人が行き来をする関係にないと答えている。

注2) 2006年「地域の教育力に関する実態調査」によると、小中学生を育てる養育者の55.6%が自分の子ども時代と比べて、地域の教育力が低下してきていると答えている。

注3) 木村直子(2017),『子どものウェルビーイング実現のための基盤形成に関する研究』,平成25年度-平成29年度 文部科学省科学研究費若手(B)【課題番号:25780333】「家族と地域の協働による乳幼児のウェルビーイング実現のための基盤形成に関する研究」報告書のデータ及び記述を一部改変して引用している。

文献

木村直子(2017),「子どものウェルビーイングを保障する新たな子ども家族支援の可能性:徳島県における家庭教育推進リーダー養成事業の展開を手がかりに」,『鳴門教育大学研究紀要』,鳴門教育大学編,32, pp215-225,

木村直子(2017),『子どものウェルビーイング実現のための基盤形成に関する研究』,平成25年度-平成29年度 文部科学省科学研究費若手(B)【課題番号:25780333】「家族と地域の協働による乳幼児のウェルビーイング実現のための基盤形成に関する研究」報告書

徳島県教育委員会(2016)『家庭教育推進ワークショップとくしま親なびプログラム集』,第1版 第1刷(第2刷(2017),第2版(2018))

内閣府(2009),『平成20年版 青少年白書』,p59

付記

本論文は、平成29年度地域連携協力事業研究助成「徳島県内の学校園における家庭教育支援推進に関する実践研究—とくしま親なびプログラム・ワークショップを活用して—」の成果報告である。本研究は、徳島県教育委員会生涯学習課との連携で実施した実践研究であり、助成金によって、豊かな実践を行えたことに感謝いたします。また本事業及び実践が、県内の親なびげーたーの皆さまのご理解とご協力に支えられていることに、この場を借りて心より感謝申し上げます。

